

気がつく

菅田 忠志

観天望気という気象用語がある。雲の形や動き、風向きや気温の短時間変化などから、天候の傾向を把握するもので、時には急変するきびしい気象条件を察知し、早目の対応をとることで、危険から身を守るのきにも役立つものである。

山や海で仕事をする猟師や漁師にとつて、昔から伝わる生活の知恵から生まれたこの観天望気は、身の危険を予知したり、逆に収穫を増やすことに利用されてきた。

この知恵や知識は、我々が登山をするときにも大いに生かされ、時には、危うく遭難するような天候の急変を予知し、難をのがれることにも生かされてきた。

昭和40年5月の連休に、クラブの春山合宿を北ア

ルプス五竜岳で実施したときのことだったが、入山時は初夏を思わせるような晴天に恵まれ、まだ残雪が2センチ以上も残る遠見尾根を、順調にキャンプを進めていた。

3日目頃から、ラジオの気象通報で描く天気図にも少しずつ変化が現れ、台湾近海で発生した2個の低気圧が、不気味に発達しながら接近してきていた。4日目には朝から風雪がきつくなり始め、さらに悪化すると判断し、すでに前日から停滞日と決定していた。

しかし、4日目の朝、7時頃には、まだ風雪もゆるく、安定している様子もみえていた。血気盛んな若手部員はむずむずしており、ベテラン部員がリーダーとなり、引き返し可能地点までを条件に許可し、新人5人をつれて五竜岳手前の稜線まで登っていた。しかし、この後天候は急変した。ここ第2キャンプ地と、上の稜線ではその急変の度合いもまったく様子が違っていた。

「上はすごい吹雪で身動きが取れなくなった。仕方ないから穴を掘ってピバークをする」と、無線で知らせてきた。

まずい！ 思えば、前夜作成した天気図で、台湾近海の低気圧の動きの速さと発達の際いから、その後の荒天に気づきながら、嵐の前の静けさに判断を誤った。

この時期、台湾近海で発生する低気圧は、猛烈な早さで発達し北上してることがある。「台湾坊主」と呼ばれるもので、山仲間では警戒すべき気象条件の一つであった。今回はそれが2個発生し、日本列島を挟む形で進んできていた。

「何を言つとる。そんな大所帯では雪洞は無理無理。こちらの判断ではその近く南方向300メートル以内に五竜小屋があるはずだから、頑張つて見つけろ！ しかし絶対に全員が離れるな」

停滞していた者もテントを飛び出し、救援に向かう途中、何度かの無線交信でなんとか小屋を見つけ

て避難したと連絡してきた。無人小屋ではあるが、小屋に入ればなんとかなる。彼等に任せてテントに引き返す。

その晩は吹雪がおさまらず、第2キャンプ地でもテントが雪で半分以上埋まってしまった。

幸い低気圧の通過速度が速く、翌日はすっかり回復した。非常食で頑張つて降りてきた彼らを、途中温かいコーヒで迎えてやった。

この年の春の大荒れは、あちこちで遭難があいつぎ、彼らが避難した小屋の近くでも2名が小屋を見つけれずに凍死していた。

あのとき作成した天気図にひそむ落とし穴に気づきながら、生かせなかったことを、強く反省させられた春山合宿となった。